画面の奥に広がる愉快でけなげな自然の営み。そんな景色を感じてほしい。

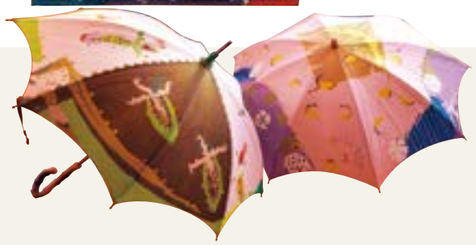
蝋纈染（ろうけつぞめ）作家

近藤卓浪（こんどうたくろう）さん

溶かした蝋を筆で布に置き、蝋を置いた部分を防染して模様を染め出す蝋纈染。色を染め重ねる場合はその作業を数回繰り返し、染色後にお湯などで蝋を洗い流すと蝋を置いた部分が白く染め抜かれる。模様の輪郭がシャープに表現できる型染とは趣が異なり、絵画的で温かい雰囲気に染め上がるのが蝋纈染の特徴。

中国では二、三世紀頃からすでにあったといい、わが国には天平時代に渡来したといわれています。

上・左／温めた蝋を置くための筆と蝋を溶かす電熱器
近藤さんは天ぷら用の小型の電熱器を使っている
下／右から。色をぼかす時に使う木蝋、粘度の高いマイクロワックス、最も一般的なパラフィン蝋。これらの蝋を使いわけたりブレンドしたりする



上／『蓮雲』
下／日傘
左『玉蜀黍にピンボール』
右『松ぼっくりとコイン』

蝋纈染の工程は、先ずは対象物のスケッチから始まり、草稿つまり下絵を何枚も描いて、それを実寸に拡大して一度水彩で着色し、その絵を布に描き直してようやく蝋引き。蝋は電熱器で温めて溶かし、筆に含ませて布に置いていきます。一般的なパラフィン蝋からより防染力の高い蝋をブレンドするなど蝋の置き方、生地との相性、その日の気温や湿度など、さまざまな条件と照らし合わせて工夫しながら薄い色から染めていきます。複数の色で描くためには、色数の分だけ蝋を置いては染め、置いては染めと少しずつ濃い色を染めていくのだそうです。

近藤さんが最も時間を割くのは下絵の工程。染め上がった作品は木綿なら近藤さん自らお湯で洗い落とし、絹であれば特殊な液体で洗い落とす業者に外注します。とてもめんどうな作業の繰り返しです。

近藤さんが最もこだわる草稿つまり図案のモチーフは、ほとんどが自然。虫や蝶、魚などの生き物から木や草花などの植物、時には風や光といったありふれた自然ですが、

「まだ、見たこともない自然の営みは僕には宝物。その宝をモチーフにしたくて樹液の出る木を探して暗くなった森を彷徨（さまよ）い歩いたりします。怖いことは怖いのですが、ちょっと子どもの宝探しみたいに、ワクワクする」と子どもの宝探しみたいに笑う近藤さん。

そうまでして、自然の中からモチーフを見つけようとする理由を近藤さんは、

「人もまた、自然の一部ですよね。だから人が創り出すものも自然の営みの一部だから」といたって控えめに語ってくれますが、たとえ人間の目には見えなくても、あるいは見ないようにしようとしても、確かにそこに自然は命の営みを続けている。だからせめて、虫や魚や木々たちの営みを想像してほしい―そんな大切なテーマをとても愉快な絵を通して語りかけているようです。

これまで染めた海をテーマにした模様たち。鰈、石蟹、ダツ、カサゴなど

近藤卓浪（こんどうたくろう）

プロフィール

昭和57年（1982）、大阪生まれ。平成16年（2004）大阪芸術大学工芸学科染織コース卒業。平成18年（2006）京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。現、奈良芸術短期大学染織コース主任。京都工芸美術作家協会会員、日本新工芸家連盟近畿会会員、日展会友。日展特選、日本新工芸展東京都知事賞、京都美術工芸ビエンナーレ優秀賞など受賞多数

上／工房の壁際に架けられた大小さまざまな刷毛。大きな作品は筆ではなく刷毛を使って蝋を塗る
下／染め上がった作品はパネルに張り、美術館やギャラリーで展示する

『玉蜀黍（トウモロコシ）にピンボール』
朝露をピンボールに見立て、トンボや葉っぱが回転しながらボールが落ちていく様子を模様化したもの

文ー石橋郁子　写真ー大道雪代